

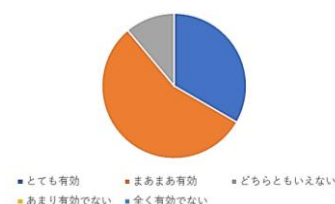
### Ⅲ 研究のまとめ

小学部では、この研究の取り組みにおいて新たに取り入れた視点や考え方、また、以前からあったが改めて位置付けを確認した視点や考え方に関して、それぞれの段階で有効に機能していたかについてアンケートを実施した。回答は「とても有効」「まあまあ有効」「どちらともいえない」「あまり有効でない」「全く有効でない」の5段階で設定をした。結果は以下のとおりである。

#### <実態把握について>

- ・新たに取り入れた視点：行動観察のための17点の共通項目、KIDS 検査の結果
- ・確認した視点：太田ステージ検査の結果

とても有効	まあまあ有効	どちらともいえない	あまり有効でない	全く有効でない
3	5	1	0	0



- ・共通「17項目」を決めたことで、様々な視点から児童の実態をみることができるようになった。また、各項目に記載する実態の内容を共通認識することで、引き継いだ際に実態を読み取りやすくなった。
- ・KIDS 検査の結果は目標設定に直接かかわるものではなかったが、行動観察による実態の裏付けとしては参考になった。

#### <情報の整理について>

- ・新たに取り入れた視点：「よさ」と「困っていること」を整理し、関連付けて考える
- ・確認した視点：「よさ」（得意なこと、興味関心）に注目する、保護者の願いを確認する

とても有効	まあまあ有効	どちらともいえない	あまり有効でない	全く有効でない
1	8	0	0	0

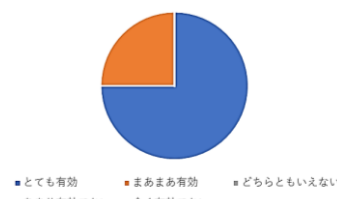


- ・前研究から大切にしている「よさ」に注目することに加え、課題を把握することで、目標立てにつながる実態把握ができるようになった。
- ・17項目と合わせて「よさ」と「困っていること」を見ていくことで、課題となる面や、指導に活かせるような面が見つけやすくなった。
- ・保護者の願いをしっかりと位置付けたことは、個別の指導計画は学校・家庭が連携して作っていく、という視点からは有効だった。しかし、子供の実態と合っていない場合もあり、年間指導目標を設定するうえでは参考程度だった。

<年間指導目標の考え方について>

- ・新たに取り入れた考え方：①「困っていること」から課題とその背景、②「よさ」から、より伸ばせるところや指導に活かせる手立てを考え、③このような指導をすれば、このような姿が見られるのではないか、という指導仮説をまとめる。

とても有効	まあまあ有効	どちらともいえない	あまり有効でない	全く有効でない
6	2	0	0	0

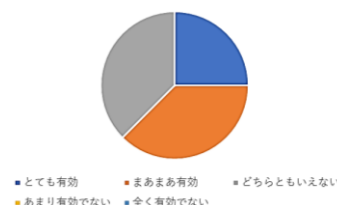


- ・よさや課題を整理することで目標設定の理由が明確になった。また、その考え方の順番も整理したことで、指導までの流れがわかりやすくなった。
- ・目標設定の理由が明確になり、教員間、教員と保護者間で共通理解を図りやすくなった。

<半期の指導目標の設定について>

- ・新たに取り入れた考え方：具体的な「指導場面」「指導内容」「目指す姿」を考えたとうえで、半期の指導目標を設定する。

とても有効	まあまあ有効	どちらともいえない	あまり有効でない	全く有効でない
2	3	3	0	0



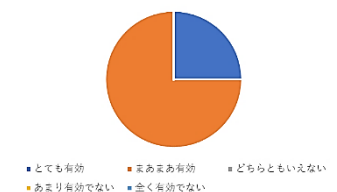
- ・「目指す姿」を入れたことで評価の基準ができ、実践の評価がしやすくなった。
- ・小学部の授業を具体的にイメージできていないと、授業計画を参考にしても具体的な場面や姿を考えることが難しかった。

<形成的評価、総括的評価方法について>

- ・新たに取り入れた考え方：児童の様子の「記録」とそれに対する「分析」を形成的評価とする。  
「分析」では「記録」の背景や理由を考えたり、目標・指導内容・手立て等の見直しを行ったりする。

- ・確認した視点：総括的評価では「指導内容」「具体的な手立て」「児童の様子や変化」「次の課題や取り組み」等を記載する。

とても有効	まあまあ有効	どちらともいえない	あまり有効でない	全く有効でない
2	6	0	0	0



- ・定期的に記録を残しておくことで、総括的評価はしやすくなった。また、指導形態ごとの記録にしたことでやりやすくなった。
- ・指導につなげるための分析の仕方には課題が残る。

## 1 研究の成果

### 1-1 教員間、教員と保護者間の共通理解と検討のしやすさ

今回の取り組みでは、行動観察のための17点の共通項目をはじめ、「よさ」と「困っていること」に注目をする、年間指導目標までの考え方の道筋を明確にする等、視点や考え方を具体的に統一した。これにより、教員間、また教員と保護者で共通理解がしやすくなり、目標や指導の方針について検討がしやすくなったことが成果としてあげられる。

特に、年間指導目標の考え方については、これまで個々の教員に任されており、主観的なものになったり、前担任から引き継いだものになっていたりしたが、この道筋で考えることで年間指導目標を設定した根拠が明確になり、学部の全教員での検討がしやすくなった。

### 1-2 定期的に見直し、修正する流れの確立

三次の取り組みから、評価とそのフィードバックを中心とした視点や考え方の整理を行ってきた。今年度、評価の記録を残していく期間を見直し、指導形態に合った期間としたことで、評価の積み重ねが行いやすくなった。一定の期間で評価の記録をし、担任間で共有する時間を設定したことで、児童の目標や手立て、学習内容や指導の方針等について、定期的に見直し、修正をしながら、担任間で検討して共通理解をもって指導する流れを確立することができた。また、定期的に見直しをする中で、有効な手立てや、児童ができる条件等を具体的にしていけるようになったことも成果としてあげられる。

## 2 今後の課題

### 2-1 活用しやすくするための工夫

今回の研究では、考え方を丁寧に整理してきたため、児童一人に対して記録をする内容、分量が多くなってしまった。整理してきた視点や考え方自体は、有効に機能していた、という意見が多かったが、同時に全員の児童に対して活用していくのは難しいという意見も出ている。今回整理した視点や考え方を残しながら、活用しやすくするための工夫が課題としてあげられる。

### 2-2 情報の活用や記録の分析の仕方の工夫

実態把握で取り入れた発達検査を使った指標は、年間指導目標を設定するうえでは参考程度であったという意見が出ていた。しかし、主観で行われる行動観察の裏付けをするためにも、発達検査のような客観的な指標を実態把握に位置付け、活用していくことは重要であるので、検査の研修をしっかりと行い、活かせるようにする。

また、評価の中の分析に関しては、視点は設定したものの、児童の様子と、教材や環境整備等を含めた教員の働きかけを分けて見取ることが難しい現状が見られた。児童の力やできることと、教員側の働きかけを区別して捉え、それがどのように相互作用しているかを整理していき、指導に活かせる分析としていくことが今後の課題である。